



NIIRUPITO NO YORU • HIROSHI ARAMATA

シム・フースイ version 2.0

ニールピト
一色人の夜
荒俣宏

角川ホラー文庫



シム・フースイ Version2.0

ニイルビト よる

二色人の夜

あらまた ひろし

荒俣 宏

角川ホラー文庫 H2-2

9238

平成5年12月24日 初版発行

平成6年4月5日 再版発行

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

電話/編集部(03)3817-8451

営業部(03)3817-8521

〒102 振替東京3-195208

印刷所——旭印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——田島照久

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。

送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Printed in Japan

定価はカバーに明記してあります。

ISBN4-04-169022-6 C0193

シム・フースイ Version 2.0

ニ^ニ色^{イル}人^{ヒト}の夜



荒俣 宏

シム・フースイVersion 2.0
ニイルピト
二色人の夜／目次

一・〇〇 サング礁の叛乱

一・〇一 川平^{かびら}パラダイスリゾート

一・〇二 フロントにいた少女

一・〇三 オーナーの趣味

一・〇四 海でみつけたもの

一・〇五 ニワトリを飼う男

一・〇六 夢うつつ

二・〇〇 ビッグジュルという名の防塁

二・〇一 カミダリー

二・〇二 小夜の告白

二・〇三 ^{ニイルビト}二色人と猫

三・〇〇 小夜が待つ人

三・〇一 救い主の気配

三・〇二 運びこまれた機械

三・〇三 二十一号室にて

三・〇四 コンサルタントの到来

三・〇五 もうひとつの霊石

三・〇六 滅びた村にて

九

二

三

四

五

六

九

七

三

五

三

二

五

九

六

三・〇七 客を待ちかねて
三・〇八 対面

一八五
一九三

四・〇〇 仮想現実

四・〇一 からまりあった糸
四・〇二 ミズチ、謎の本体と遭遇する
四・〇三 見えないものと、見えるもの
四・〇四 血よりも濃い絆

二〇七
二一四
二二一
二六一

五・〇〇 ニイルピトの夜

五・〇一 第四のビジュアル
五・〇二 霊石の破壊
五・〇三 悪夢のつづき
五・〇四 逆襲のはじまり
五・〇五 海中の探索
五・〇六 死の使い
五・〇七 くみ子からの手紙

二七五

二八六

三一四

三三三

三四〇

三四八

三六四

六・〇〇 エピローグ 再会

あとがき

三八二

三七九

一・〇〇

サンゴ礁の叛乱

一・〇一 川平^{かびら}パラダイスリゾート

この世で最も呪^{のろ}わしいもの。

それは——たぶん、パラダイスの蛇だろう。魂が最も心安らぐべき場所に住みついた、狡猾^{こうかつ}で邪悪な悪魔。

神に祝福され、自然に愛^めでられた無憂の園であるはずのパラダイスに、おぞましい毒蛇の群が胴をからませあい、楽園に憩^{やすみ}いにきた天使たちをおびやかす。これほど呪^{のろ}わしい光景があるだろうか。

この毒蛇たちは、群をなしてからみあい、身をよじりあう。メドゥーサの頭髮^{かみ}に巢食^{すく}つた邪悪な蛇も、また、この悪魔たちの同類である。

パラダイスの毒蛇は、死の臭いのする毒液を、近づいてくる天使めがけて、片っぱしから吐きつける。天使たちは、黒いコールタールのような毒液を浴びたとたん、その個所が焼け焦げる苦しさに、泣き声をあげる。

その泣き声を聞いて、蛇たちはいよいよ興奮し、ざわめきだす——。

そんな悪夢の光景が、実際に、地上の楽園と呼ばれる亜熱帯の島に出現したとしたら。だが、不幸にも、事件はほんとうに起きた。パラダイスから落ちてきたメドゥーサの首が、

その夜、石垣島いしがきじまのあくまでも白いビーチの上に、根を張った。

メドゥーサの首？ いや、遠くから見るかぎりでは、すぐにそれとわからない。むしろそれは、原爆のキノコ雲のようにみえた。

ただ、本物のキノコ雲よりずっと黒くて、固くて、しかもずっと小さかったが。まっ黒で硬いキノコ雲は、干上がりかけたサンゴ砂の上に、毒どくしいオニヒトデそっくりのかたちをして脚を張り、魔王のように君臨した。

果てしなくひろがる夜の海を背後にひきつれて、いま、海から頭をもたげたメドゥーサ。たったいま、陸に露出したばかりなのに、すさまじい悪臭を放つ。楽園は、たったいま、おぞましい海の悪魔に汚けがされたところだった。枝サンゴだらけの窪くぼんだ頭から、海水が流れおちた。

腐った枝サンゴの肉が、その流れに混じって、ドロリ、ドロリと下へ落ちていく。

キノコ雲のかたちをした、黒く、まがまがしく、しかも悪臭を放つその大岩は、たしかに、メドゥーサのように蛇の頭髪をふり乱し、白いサンゴ砂のビーチを見すえた。メドゥーサの蛇の頭髪！ まさしく、この奇怪なサンゴ岩の不気味さをいいあてた連想だった。メドゥーサの頭髪は、ほんとうに動く。腐った枝サンゴから、腐臭を放つ死肉がドロリと落下するたびに、その枝が動くのだ。

枝サンゴにまとわりついた臭い海藻も、不気味な照りを放ちながら溶け落ちていく。甲

羅に死人の顔をつけた巨大なカニどもが、列をなして枝サンゴ伝いに、ビーチへと降りていく。

悪臭があたりの夜気を毒した。

怒りに燃えた、黒い、腐りかけたサンゴ礁は、ビーチの奥にある白い、しゃれたコテージ群を睨めつけた。

死人の顔の模様をもつかニどもが、ざわざわとビーチを横走りしていく。

その恐ろしさに、潮さえもが早ばやと退いた。あとには、黒い巨大なメドゥーサの頭が残った。

しかもその周囲に、腐ったサンゴの肉と溶けた海藻のどす黒い汚物を、バリケードのように積みあげながら。

大岩の頭髪をかたちづくる枝サンゴの蛇が、またもうごめいた。うごめくたびに、呪わしい腐臭が熱帯の夜空を毒していく。

それはまちがいに、平和なパラダイスの渚に出現した、まがまがしい腐敗のキノコ雲そのものだった――。

不快な目ざめだった。

といって、暑い沖縄の音があまりにも濃すぎたからでもなかった。

枕もとに置いたデジタル時計を、焦点がまだ定まらない目でさぐると、∞…∞の表示

がみえた。夜明け前の、最後の重い闇……。

いや、そんなはずはない。だいいち、部屋のむこうの窓ぎわにあるスタンドは、オレンジ色をした灯が点きっぱなしだし、ゆうべ消し忘れたまま眠ったので、テレビの画面が七色のバンドを映しつづけていた。だから、部屋の中に闇の気配があるわけではない。にもかかわらず、部屋は重苦しい闇の侵入をうけていた。

それでも、テレビ画面に映っている七色のテストパターンが、心をなごませてくれた。石垣ケーブル・テレビは、番組が終了すると、この静止画面を流す。鉅賀くみ子はこのチャンネルがすっかり気にいつていた。東京で流行っている各局の高視聴率番組を、ごった煮のように流しているからだった。日本テレビ系の『すすめ電波少年』がきたと思うと、次にテレビ朝日系の『セイシュンの食卓』がつづき、とつぜんローカルな『八重山ナウ』という番組で締める。この地域情報番組に出てくる女性アナウンサーの、一本調子なおしやべりが、くみ子を微笑させた。

でも、不快な目ざめの原因は、もつと別にあった。

全身が汗ばんでいる。くみ子は、「川平パラダイスリゾート」とネームのはいったタオルで、首すじをぬぐった。でも、変だ――。

にぶい唸りをあげるエア・コンディショナーを、つけっぱなしにしておいたから？ いえ。四月の石垣島は、すでに夏の暑さで、コテージの室温を快適な状態に保つためには、連続運転にしておく必要があった。そうであれば、全身にこれだけ汗をかく理由はない。

音？

たしかに、エア・コンディショナーの鈍い運転音がくみ子の神経をいためつけているのかもしれない。低周波は頭痛をひきおこす。彼女は上半身をおこし、栗色に染めたつややかな髪を二度、三度と振ってみた。

不快感はおさまらなかった。

息ぐるしい。

汗まみれになっているのも、それが原因らしい。彼女は眉をひそめ、ベッドを抜けだし、ベランダへ出るガラス戸をあけに行った。途中でテレビの電源をおとし、まだ星が青色に輝いている空を見あげながら、ガラス戸をあけた。あけるまでは重かったけれど、あきはじめると、あとは楽に戸が動いた。

くみ子は、なまぬるい外気を胸いっぱい吸おうとした。その瞬間、彼女の肺が外気を取りこむことを激しく拒絶した。まるで毒気が気管を通して侵入したかのように、激しく反撥した。

ふいに咽喉が痛くなった。同時に嗅覚が麻痺した。倒れそうになるくらいの悪臭が、彼女を打ちのめした。

くみ子は、あけたばかりの戸にしがみついた。頭が締めつけられ、呼吸ができなくなった。外気はすさまじい死臭を帯びていた。

必死の思いでガラス戸を閉じ、そのまま後方へ倒れこんだ。青いマットの上に腰から崩

れて――。

両手をついて、肩を波うたせながら、呼吸^{いき}をした。あの悪臭が室内に忍びこんでいたから、息を吸うたびに鼻と咽喉が悲鳴をあげる。

コテージがなぜ悪臭に包みこまれたのか、彼女には理由^{わけ}がわからなかった。目の前は、白いサンゴ砂のビーチがひろがっているし、空にも、東京ではとても見られない無数の星が、降るようにまたたいているというのに――。

――ちがうわ！

くみ子は、ガラス戸越しに外をみつめながら、声にならない叫びをあげた。

ちがう！ たしかに、いつもの夜の眺めではなかった。

何が？

星空の下でも白さを失っていないサンゴ砂のビーチ。そのビーチに、黒い大きな穴があいていた。

ほんとうに穴のようだった。

黒ぐろとしたキノコ形のかたまりが、白いサンゴ砂を汚している。

――何なの？

くみ子はガラス戸に顔を圧^おしつけ、目をこらした。

それは大きな黒い岩だった。岩というよりも、サンゴ礁のかたまりといったほうがいい。海岸の幅と比較してみると、かなり大きい。差しわたし三、四メートルはありそうだった。

つい今しがた、波が運んできたかのように、岩の表面にぬらぬらと照りがみえた。枝サンゴや海藻のような生物を、岩の周囲にびっしりと付着させているのだらう。輪郭が異様にでこぼこしている。

もちろん、夕べは海岸にこんな大岩なんかなかった。彼女のコートージからは、一点の汚れもない純白の砂が、濃い緑色の海と接しあっていた。たしかに、昼間は、かなり沖まで出ただけけれど、海中のところに青い窪みが見えただけで、岩なんかなかった。だが、ここは生きたサンゴ礁の海だ。シュノーケルをくわえて海中を眺めると、光り輝くようなコバルト色を発色する熱帯魚コバルトスズメが、サンゴ礁にたくさんついている光景が見えても、ふしぎではない。

そのサンゴ礁が、とつぜん、水死体のようにビーチへ打ちあげられた。

——潮が引いたせいかしら。でも、こんな大きな岩、見かけなかったわ。合理的な解釈をしてもみたが、事実彼女は彼女を撥ねつけた。サンゴ礁の大岩がぼこんとキノコ雲のように突きだしているのは、満潮のときにすら潮があがってこられない砂浜の奥だった。

そばに、しまい忘れたビーチチェアも見える。あのビーチチェアまで波が押しよせることはない。

だとすると——、

サンゴ礁が自力で海岸へあがってきた。そうとしか考えられなくなる。

鉅賀くみ子は、二十九歳のすこし世慣れた笑いをくちびるに浮かべた。サンゴのかたま